



【研究発表】 5月定例会で発表予定のテーマでしたが、開催中止となったため、今号にて要旨をご紹介します。

17世紀イシカリの大酋長ハウカセとテイネ

手稲郷土史研究会 会員 沖田 紘 昭



歴史上にハウカセの名前が出てくるのは、1669（寛文9）年、「シャクシャインの戦い」があったからである。何か事が起こらなければ、決して知り得ぬ巡り合わせである。二人は、ほぼ同じ時代を生きた“東蝦夷”と“西蝦夷”の大酋長であった。

この時代の記述として残されたものは、以下の四つの史料である。①『渋舎利蝦夷蜂起に付出陣書』、②『蝦夷談筆記』下、③『寛文拾年狄蜂起集』、④『津軽一統誌』巻第十。ハウカセが登場するのは「シャクシャインの戦い」の中であり、片や勢力を

背景として戦う者として、片や戦わぬ者として現れる。①の史料はこの戦いで松前郡の総指揮に当たった松前八左衛門が幕府に報告した文書、②は1710（宝永7）年に幕府巡検使 北条新左衛門と一緒に渡った 弟子の松宮観山が アイヌ語の通訳 勘右衛門から聞いた話を筆記したもの、③は松前藩に派遣された津軽藩士 則田安右衛門の記録、④は津軽藩の正史で、1669（寛文9）年の津軽藩士 須藤惣右衛門・吉村場左衛門の報告と、翌1670（寛文10）年に派遣された津軽藩の隠密 牧只右衛門・秋元六左衛門の報告からなっている。



さて、「シャクシャインの戦い」は、シャクシャインが 東方十勝から静内川シブチャリのセンタイン酋長のコタンに入るところから始まる。当時、静内川中流部はハエクル、下流域をメナシクルとって狩猟圏が分かれていた。ハエクルの首領はオニビシ、メナシクルは代が替わってシャクシャインが首領になっていたが、互いに越境しては、小競り合いが絶えなかった。松前藩が中に入り仲裁を試みるが 収まらない。「前期シブチャリ戦争」では 金掘り 文四郎が使者となり、シャクシャインの和解の印である太刀を持って松前へ向かうが、その後 松前からは何の音沙汰も無い。やがてハエクルのオニビシが討たれた。「後期シブチャリ戦争」で主力を失ったハエクル側は、ウトウを松前に派遣し武器と俵物を要求したが、受け入れられなかった。ウトウは帰り道、野田生で疱瘡にかかり（毒を飲まされ）死亡する。これを境に 松前藩による全アイヌ民族毒殺の疑いが拡大し、かくも執拗に争ってきたハエクルとメナシクルが、一致結束して松前と戦うという構図が誕生するのである。

シャクシャインが全道のアイヌに送った檄として、新谷行氏が著した『アイヌ民族抵抗史』（1977年・三一書房刊）の一節を紹介したい。創作加筆は若干あるが、当時の状況をよく伝えるものと思われる。「松前藩の非道は 日を過ぎてひどくなっている。いまやわれわれアイヌ同胞を全滅せんと策略を企てている。沙流のウトウが松前に入って毒殺されたのは 何よりも証拠である。今年、アイヌモシリにやって来る船は皆 毒を持っている。この毒で 子どもから女老人にいたるまでわれわれウタリを毒殺せんとしているのだ。われわれは これを黙って見逃すわけにはいかない。



A シャクシャイン戦争関係図

全ウタリの生死がかかっているのだ。いまこそ 全島のアイヌ同胞は起ち上がらねばならない。アイヌモシリにいる和人の鷹打、船子、砂金掘り杭夫等をことごとく殺し、これらから食料を奪って兵糧とし、一斉に松前に攻め入って 和人を一掃しなければ、われわれは全て殺されてしまうだろう。全島のアイヌ同胞よ、起ち上がれ、武器をとって松前へ攻め入ろう！」――。



シャクシャインの檄を受けて 全道のコタンが在地蜂起に至った。※A図参照 各コタンでは、居住する商人、水夫、鷹侍、金掘りなど、数十人から数百人の和人が殺された。やがてアイヌ側が日高から松前に向かって進軍を開始する。松前軍はクヌイに最前線の陣を築く。津軽、南部藩にも応援を求め、もはや幕府軍となった松前軍は重火器を持った近代的な装備で、当然 毒矢とグリラを主力とするアイヌ側に勝ち目はなかった。クヌイの戦いに敗れたアイヌ軍は敗走を続け、ついに シブチャリの砦まで囲まれてしまった。勝ち目の無いことを悟った息子 カンリリカに説得された シャクシャインは、ツグナイをするために呼び出されたその館で、酒を飲まされ火をかけられ、あえなく討ち取られるのである。

しかし、シャクシャインの檄に応じなかった酋長がいた。それが 松前藩がもっとも恐れる、石狩川河口から支流全域を勢力圏とする 大酋長 ハウカセであった。彼にはどうしても武力で解決できるとは思えなかった。シャクシャインは簡単に人を殺める。しかしハウカセは決して殺さず、松前藩に介入の口実を与えないのである。そして、松前藩の後ろには大きな幕府が控えていることを知っていた。石狩河口に 300 もの武装小屋を作り、準備は怠らなかった。勢力圏の酋長を引き締め、在地蜂起せぬようしっかりと方針を指示していた。ハウカセにとっては 松前藩だけが相手ではなかった。かつて津軽藩や秋田藩とも交渉があった。乱の終結後、度々の松前藩からの呼び出しにも 騙し討ちを勘ぐり応じない。奥地は魑魅魍魎の跋扈する恐ろしい場所であるから、海岸線しか知らない松前藩には手が出せない。結局、最後までハウカセは武器を交えることなく生き抜いた。「1672年6月 ハウカセと日本海側アイヌ 200 人松前参上」(『弘前藩庁日記』より) を最後に歴史上から消える。

『シャクシャインの戦い』(2016年・寿郎社刊)で著者 平山裕人氏は「松前と渡り歩く体制はハウカセのような、統率力と政治的な読み、腹をくくった行動が出来る人物こそ適任だが、常人には後を継ぐことはできない。ハウカセはアイヌ史上最大の外交の名手である。」と、最大限の賛辞を贈っている。



ところで、ハウカセの拠点はどこか。『津軽一統誌』に「石狩浜口より一里登り候て、はつはやふより二里登候てさつほろと申所に狄有。さつほろの枝川に豎横半里計の沼御座候。川添より順



B 『津軽一統誌』にみるハウカセの拠点

風に二日登り候てちよまかうたと申す所に狄多御座候。松前よりの船 ちよまかうた迄参候。方々の狄共 ちよまかうたへ集りあきない仕候由に御座候。ちよまかうたより 津石狩と申す所迄 川路二日に登申し候由。是迄大船通に能候得共、水はやく候て、中々難儀仕候由、ちよまかうたより上へは船登不申事。ちよまかうたよりハウカセ在所迄、五日路程御座候。又成る程急ぎ候て小舟にて二日に参り候由申す者御座候由。石狩大川あり。浜にかかり潤有り 川口に狄家数を知らず。其の川のうえに七里奥に上の国総大将居城有り 大将ハウカセと申し候。下人狄千人程有り」とある。※B図参照 テイネは、ハッシャブに含まれたハウカセの勢力圏にあった。

この時代は、テイネ山麓からオタルナイまでは ハッシャブの乙名 チルトキの狩猟圏であった。ハッシャブに商い場があり、近隣のコタンからここに集まって交易をしていた。

サンタルベツのコタンも同様である。イシカリ流域圏の産物は鮭、鷹、巢鷹（幼鳥）が有名で、多くの鷹侍が常駐していた。ハウカセが石狩浜に 300 もの武装小屋を掛けたということは、石狩川流域に有数のコタンがその数だけあったということではないか。

『ハウカセの大きな石』（2007年・北海道出版企画センター刊）を書いた不破俊輔氏は、ハウカセの妻がタマルであり、彼女がサップロの乙名チルトキの娘で、ハッシャブの大将ヨロタインの従妹であるとした。夏のある日、イシカリへ出たハウカセはそこでタマルに出会い、一目惚れして盛んに発寒川を遡りハッシャブコタンへ会いに行くようになった。ある日、二人で手稲山にのぼり、眼下にイシカリの大平原を眺めながら結ばれる――。この話はどこまでが事実でどこが創作なのか判断ができない。前掲の四つの史料には見えない。しかし、アイヌのコタンは近隣同士が姻戚によって結ばれていて、手稲山はハウカセにとっても冬場の大切な狩猟域であったであろうから、ありうる話なのである。ハウカセの本拠地 浦臼のチャシからはこのような雄大な景色を見ることはできない。彼は、雄大な平原を鳥瞰できるテイネ山をこよなく愛した。そして同胞が棲む数百のコタンの安全を思い、自らの勢力圏であるこのイシカリ川の蛇行する狩猟圏とアイヌ民族の生きる権利を守るためにどうすべきかを考えた。手稲山はハウカセと共にあった、と思いたい。



シャクシャインの戦いは、北海道のアイヌ民族の頂点で起きた 和人とアイヌ民族間の最大の戦いであった。奥州胆沢の 789（延暦 8）年「アテルイの戦い」のように、互いの武器が槍、刀、弓の時代はなかなか決着がつかないが、鉄砲の出現により 果たくまに終息を迎えるのである。

中野みち子氏著『シャクシャイン物語』（1985年・けやき書房刊）のあとがきで井野川潔氏は、「それは昔ながらの狩猟民族アイヌのアイヌ国の自然の生活にたいして、その平和で美しい共同体社会の生活を破壊するものとして、松前藩のアイヌ統治政策があり、その庇護のもとに、和人の武士や町人たちが侵入してきて、産物の収奪と自然破壊を繰り返します。そのやりかたは、まるで強盗のような前近代的な略奪交易であり、しかも狡猾で、悪辣で、酷烈なのです。」と述べている。

この非道に立ち向かったアイヌの人々は、生き残った者も捉えられ 打ち首となり、コタンの乙名は松前の言う事を聞くアイヌに置き換えられていった。こうして敗戦後は、未だかつてない完全な隷属の時代に入るのである。『シャクシャインの戦い』に記される「これ以降 松前藩は、一年の一定時期以外は、商人、金掘り、鷹師、かつてな漁撈などの和人の自由な立ち入りを極力控えるようになった。このことは明治まで続くのである。」だけが、かすかに残った この戦いの成果なのであろう。

※研究に当たっては文中に示した史料・書籍のほか、札幌裕康氏著『散りぬるを～アイヌモシリの世界』（2000年・文芸社刊）、北海道大学 アイヌ・先住民研究センター 丹菊逸治先生講演会「ことばと文化にみるアイヌ民族の歴史」（2021年2月15日・北海道文化財保護協会主催）なども参考にさせていただいた。なお、「乙名」は松前藩が指名したコタンの責任者のこと。

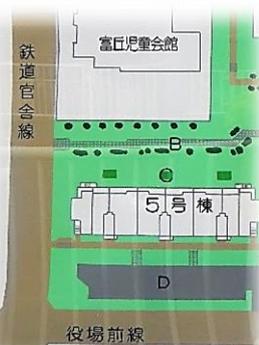
遺構・遺物は語る

道路名に見る「ちょっと昔の手稲」

会報 第157号で“土地の記憶”を遺す 橋梁名に触れましたが、ちょっと昔の手稲のようすは、道路の名称からも垣間見えます。

富丘の市営団地の案内板に書かれているのは「役場前線」と「鉄道官舎線」。「役場前線」は手稲コミュニティセンターに通じる道路で、手稲町役場がかつてここにありました。「鉄道官舎線」は国鉄の職員住宅由来です。札幌市の認定道路図には「光風館線」、「弥彦通線」、「梅林線」、「学校前線」、「第一小樽内川線」のほか、入植者にちなむ「大滝線」や「竹内前線」なども記されています。さて、どの辺りでしょう？ [J]

※『手稲町誌・下』、「札幌市地図情報サービス～認定道路図」（web版）ほか参照。



富丘高台団地の案内板より

【つれづれ随想】

「オイ、あれはなんだ？」

私の故郷は余市である。しかも、「ニッカウヰスキー」のそばに住んでいた。管理の緩いニッカの敷地内は 格好の遊び場だった。

あるとき、余市駅の方から 黒い塊をいっぱい積んだ荷馬車が次々とニッカの門をくぐって行くのを見た。初めて見た小学6年生の目には、乾燥した牛の糞のように見えた。「オイ、あれはなんだ？」と問うたら、「あれは泥炭というもので、ウヰスキーを作るときに使うんだとよ！ 軽川というところから運んでくるんだぞ！」と教えてくれた賢い友がいた。

ウヰスキーの原料となる大麦の麦芽の成長を止めるため、泥炭を燃やして乾燥させる。そのときに麦芽を燻蒸して香りをつけることを後に知った。秋になると 風向きによって工場の方から変なおいが漂ってきた。それは、泥炭の燃えるにおいであることも知った。

スコットランドに学び、本格的なスコッチウヰスキーづくりに燃えた 竹鶴政孝は、帰国後、余市をウヰスキーづくりの場を選んだ。①気候風土がスコットランドに似ている～熟成のために長期貯蔵にふさわしい冷涼な気候、揮発を防ぐほどよい湿度がある。②ウヰスキーづくりの決め手になるいい水が得られる～朝里岳に源を発する余市川は 鮎の生息の北限といわれる清流である。③近くに良質のピート（泥炭）や 蒸溜に使う良質の石炭があった。など、好条件がそろった土地だったからといわれている。

そういえば、母校の東中学校のグラウンドは、大勢が走れば フワフワと上下に揺れていたことを思い出す。余市川が大きく蛇行して、泥炭地を形成していたのであろう。余市の泥炭よりも、軽川の泥炭の方がウヰスキーづくりには適していたということなのだろう。蛇足であるが、生産量の多い今は、泥炭を焚いて麦芽の成長を止める工程は省き、スコットランドから 出来上がった麦芽を輸入していると聞いた。



ニッカウヰスキー余市蒸留所

以前は、正門に『大日本果汁株式会社』と社名が刻まれていた。今は『ニッカウヰスキー株式会社』となっている。正式な社名や商品登録は、「ウヰスキー」ではなく「ウヰスキー」である。ウヰスキーづくりは水が命なので 井戸の「井」を使って登録しようとしたが、カタカナと漢字の混在は認められなかったため「井」に似た「ヰ」を使用したのである。ここにも、創業者 竹鶴政孝のこだわりが見える。

永井道允（手稲郷土史研究会 会長）



★「手稲鉾山」の名付け親 石川貞治に関する資料をご提供いただきました 大正期「手稲鉾山」の経営に携わった石川貞治 ―その知られざる業績を、ご親族に当たる方が手稲郷土史研究会へご教示くださいました。鉾山に関する事柄だけでなく、札幌農学校、道庁、北海英語学校、油田開発など多岐に亘る内容はたいへん貴重です。今後の研究に活用させていただきます。ありがとうございます。

★廃止踏切についての情報をいただきました 「星置街道踏切」、「団地踏切」、「佐藤作場踏切」、「小野作場踏切」…etc. 鉄道の高架化や 道路の立体交差などにより 廃止された踏切の情報が、当会あてに寄せられました。手稲の“インフラ”の歴史を知るうえで重要な資料です。お礼申し上げます。

次回定例会 ⇒ 発表内容「サッポロ発祥の地を歩く」 渡辺 隆（手稲郷土史研究会 会員）／7月14日（水）18：15～
手稲区民センター3階 視聴覚室／マスク着用！ 非会員の方が参加される場合は 必ず事前にお申し込みください。